

とは、方法論として妥当であると思われるのである。なぜなら、日蓮聖人は『四信五品抄』に「信は慧の因」(一一九六頁)であるとして、信と智慧とを全く別個の概念とはせず、智慧が生ずるには必ず信が付随していることを指摘しているからである。また『開目抄』に示された「法華經の信心了因の子」(六〇三頁)という表現からも同様のことが理解できるのである。このようなことから、日蓮義においては、法華經を聞法することによって下される仏種は法華經の信心である、とする日隆の解釈は妥当性を得たものであると考えられる。

以上の考察から、日蓮聖人は、謗法の衆生にも強いて法華經を説き続けるということに、凡夫成仏の確信を懷かれていたと考えられる。なぜなら、聞法下種という日蓮聖人の死身弘法の実践を支えたであろう一つの理念を、そこに観取しうるからである。

〔註〕

(1) 立正大学『大学院論集』第一八号所収

近代日蓮主義研究(二)

——本多日生の布教活動について——

浜島典彦

本多日生は近代日蓮主義の流れのなかで、田中智学と比肩される一方の旗手であり、後世に与えた影響も大きい。しばしば本多は国策に沿った宗教協力者として評価されているが、ここでは彼が組織した種々の団体の動向役割をさぐり、統一閥をめぐる活動について考え、評価を問うてみたい。

明治二九年一月一三日、妙満寺派の結束を固め、他宗僧徒との対決、仏教界統一を目的とした統一団を結成した。統一団の規則は三条目から成り、雑誌の発刊、講演会の開催、各派共有の布教会堂建設を目指す等を定めている。

その一方、本多は四箇格言を訴え、他宗との法論も展開していく。この折伏布教で、小笠原長生・佐藤鉄太郎等の著名人を獲得するが、そのなかで妙満寺派の統一団ということに限界を感じていく。そこでセクト意識を払

拭いた会派の設立へと向うのである。

四二年一月十五日、本多は日蓮宗僧侶・著名人を取り込んだ天晴会を発足させた。一九一名に及ぶ会員の顔触れは、政財界・軍部・華族・学識者・法曹界・文壇等多岐に及び、支部も開設された。特に京都天晴会では春期大講習会に科外講師として河上隆・上田敏等招き、時局に対応しようとする動きが窺える。

しかし、天晴会は大正九年以降活動は鈍化し、在家日蓮主義を標榜した知識人は法華会を結成し、大正七年に本多自ら組織した自慶会運動へとその勢力を移して行ったのである。

四五年四月二七日、統一団規則第三条四項に盛られた各派共有の布教会堂統一閣が竣成した。ここでは本多の組織した団体の例会・講演会・研究会・映画会等が催されている。特に大正三年七月一日には労働慰安会が催され、本多の講演の後、余興が行なわれている。以降、各種の慰安会が年二回の安息日（正月・七日）等に催されている。

この背景には本多が陪席した大逆事件にみられる社会主義抬頭に対する危機意識があった。布教活動中、政財界・軍人・学識者等に接するうちに彼等の危機意識に応

えようとした結果、国策に沿った布教へと変していくのである。

大正七年三月二日、労働者慰安善導の目的で自慶会を組織し、工場布教へと向う。拠点は神戸製綱・名古屋日本車輛・豊田紡織機等で、月例会が行なわれた工場もある。さらに「国民精神作興に関する詔書」に呼応して国本会、昭和に入って知法思国会を翌年の教化総動員運動に通ずるものとして組織している。

以上、本多の組織した団体をみると二種の性格に分類できる。一、当時の国民感情に沿った日蓮主義信仰団体（統一団・天晴会・地明会）。二、国策に沿った大衆思想善導への宗教協力団体（自慶会・国本会・知法思国会）。また、それ等に役割分担を負わせていると言える。派内をまとめる統一団、門下統合を目指す天晴会・地明会、研究グループ講妙会、大衆に向っての自慶会・国本会・知法思国会である。

現在、統一団のみが存在するが、本多の組織した種々の団体、特に二は時代を超越した真理を持ち得たかと思うた時、「否」と答えざるを得ない。しかし、彼は門下統合を訴え、現場への布教を試み、澗治会・橋香会にも関与し、また同師会を結成して後進の育成にも当たった。

宗祖の願行を思う時、「大衆へのアプローチは今どうなるのか」と問うと、その困難さを痛感すると共に、本多の進取の気性と彼の錯誤を点検して現代に生かさねばと考えるのである。

『総と別』の關係の一考察

芹 沢 泰 謙

『法華玄義』の四序中の第二序の「蓋序王者 叙経玄意 玄意述於文心等(1)」の文を解説する『釈籤』の「次就総別解者。從記者去章安釈大師序意然大師所序。以但釈名而已。意含別故章安所釈具体宗用。以釈名是總体等是別。別別於總。總總於別。故於總中所釈兼具五章(2)」の中、「別別於總、總總於別」の用語に關係の原理が示される。「総と別」という用語は、ものの見方として、概念の全体性と個別性との相互の關連性、更に、全体性と個別性の両面からの視点を比較対照すること、その間にどのような關連性をもつのかを表現する論理構造としての關係の原理であると規定できる。即

ち、「総と別」は、ある概念を研究対象とするときの方法論として、それは「分析と総合」という論理的方法論であるとし、両者の關係は、分析は総合を予測し、総合は分析を基定とするもので、両者は相伴なって全体の統一が表現されるという、關係の原理を示すといえる。この分析と総合の關係を『釈籤』のいう總別の「別別於總」は分析は総合を予測して分析を行うことであり、「總總於別」は総合は分析を基定として総合統一を示すことであると理解できる。『玄義』の述べる広説五重玄において、名と体宗用において名は体宗用に冠して總名であり、総合表現で、体宗用は名の個別的分類の説明で別名であるといえる。この總と別の關係を日蓮聖人は更に拡大させ、妙法五字の題目と名体宗用教の五重玄との対照とするのである。『報恩抄』(3)、『四信五品抄』(4)、『妙法尼御前御返事』(5)等に、日本国と六十六箇國、妙法蓮華經の題目と法華經二十八品とを対比させ、日本國題目を總名、六十六箇國二十八品を別名として、題目を總名と表現し、更には題目の五字にすべてが撰尽されるものとして、題目を総合表現、全体表現の「總名」と強調するのである。これは題目と五重玄の間において、『本尊抄』(6)、『曾谷入道殿許御書』(7)等に示され